

富山大学 医学部同窓会報

2016. 第25号



富山大学 医学部同窓会報

2016. 第25号



C O N T E N T S

- 4 . 医学部長就任のご挨拶 医学部長 北島 勲
- 6 . 現代の人間社会が抱える諸問題を考える 会長 田淵 英一 (医学科 昭和62年卒)
- 8 . 富山大学附属病院ヘリポート
- 9 . Doctor & Medical Staff Restaurant Reposer (ルポゼ)のご紹介
- 10 . 〈富山大学医療ルネッサンス事業〉
富山大学杉谷キャンパスのご案内
- 12 . 富山大学医療ルネッサンス事業の進捗状況 会長 田淵 英一 (医学科 昭和62年卒)
- 13 . 〈卒業生教授就任挨拶〉
教授就任挨拶 人間発達科学部 発達教育学科 宮 一志 (医学科 平成11年卒)
- 14 . 〈新任教授就任挨拶〉
新任教授挨拶 内科学第二講座 絹川 弘一郎
- 15 . 新任教授挨拶 医学薬学研究部 一般教育人間文化科学 ヨフコバ 四位 エレオノラ
- 16 . 新任教授挨拶 腎泌尿器科学講座 北村 寛
- 17 . 卒後臨床研修センターについて 卒後臨床研修センター センター長 足立 雄一 (医学科 昭和57年卒)
- 18 . 臨床研究・倫理センターについて 臨床研究・倫理センター 准教授 水牧 功一 (医学科 昭和60年卒)
- 19 . 臨床研究推進センターについて 内科学第一講座 診療准教授 猪又 峰彦 (医学科 平成14年卒)
- 20 . 〈退官寄稿〉
退官に寄せて 神経内科 教授 田中 耕太郎
- 22 . 済生会富山病院の紹介 院長 井上 博 (富山大学名誉教授)
-

-
- 〈卒業生だより〉
23. 卒業5年を迎えて
医学科第30期生同窓会委員 関 友里 (医学科 平成23年卒)
24. 平成27年度 部活動対抗ソフトボール大会
26. 卒業生インタビュー企画 (加藤 陽一先生)
32. 学校探検
- 〈訃報〉
34. 恩師、高久 晃先生を偲ぶ
学長 遠藤 俊郎
35. 高久 晃先生を偲ぶ
副会長 栗本 昌紀 (医学科 昭和58年卒)
37. 恩師 高久先生との思い出
済生会富山病院 脳神経外科 尾矢 公子 (医学科 平成8年卒)
38. 吉川 由美子さんを偲んで やざわ虎クリニック 矢澤 和虎 (医学科 平成3年卒)
39. 吉川 由美子さんへ
長田 拓哉 (医学科 平成3年卒)
須藤 敦夫・大川 徹 (医学科 平成5年卒)
39. 廣瀬 勝治先生
40. わが友 中塚 栄二 伊勢崎佐波医師会病院 金子 健次 (医学科 平成6年卒)
41. 中塚 栄二君 追悼 脳神経外科 診療講師 富田 隆浩 (医学科 平成6年卒)
42. 第8回富山大学ホームカミングデープログラム
43. 第67回 西日本医科学生総合体育大会
44. 平成27年度富山大学附属病院関連病院長懇談会議事要旨
45. 平成27年度第34回富山大学医学部同窓会総会 議事録
50. 職掌分担・評議員一覧
52. 平成26年度会計報告
54. 平成26年行事報告・平成27年行事・平成28年行事予定
55. 医学部人事消息
57. 卒業生からのメッセージ
58. 編集後記

●会計からのお知らせ



医学部長就任のご挨拶

医学部長 北島 勲

この度、村口篤医学部長の後任として、平成27年11月1日付けで就任いたしました北島勲と申します。医学部同窓会の皆様に、ご挨拶申し上げます。

私は、昭和32年広島県江田島生まれですが、親の転勤で生後直ぐ、高知県に移り土佐高等学校卒業後、鹿児島大学医学部に進学しました。学生時代は卓球部と離島医療系サークル活動に明け暮れていました。昭和57年卒業後、鹿児島大学第3内科に入局し、神経内科を専攻し、主に筋ジストロフィー症や神経変性疾患等の難病の診療・研究を行いました。この中で、鹿児島大学第3内科で発見されたHAM(HTLV-I関連脊髄症)やHAAP(HTLV-I関連関節症)という新しい疾患概念の確立に寄与することができました。臨床研究からその分子病態解明の過程で、ライフワークとなる転写因子NF- κ Bと出会いました。この経験は、地域で問題となっている特有の疾患を発見し、研究成果を国際的に発展させるという富山大学の目指す大学のミッションに貢献できるのでないかと自負しております。

その後、HAAPの病態解析のために東京女子医科大学リウマチ痛風センターに引き続き、スクリプス研究所(米国、ラホヤ)、鹿児島大学医学部臨床検査医学講座助教授を経て、平成12年9月に(旧)富山医科薬科大学臨床検査学講座に教授として赴任しました。現在は、転写因子の分子病態解析に加え、敗血症起因菌迅速同定システムの開発や直接経口抗凝固薬の血液凝固モニタリング等の臨床研究を展開しております。運営面では、医学科教務委員長(平成16年、

平成21年)、医学科長(平成21年)を担当し、附属病院では検査部長としての検査業務に加え、教育・研究担当副院長と卒後臨床研修センター長(平成25、26年)を担当させて頂きました。医学部と附属病院の運営に携わってきた経験を活かして、医学部と附属病院の各エンジンをハイブリットすることでパワーアップさせ、富山大学全体を動かすメインエンジンとなれるように頑張ってゆきたいと考えております。

医学部運営にあたり、ミッションが再定義されており、着実に実行してゆく必要があります。とくに、患者本位の立場に立ち地域医療に従事する使命感を持った医師や創造性豊かな研究者等の養成を積極的に推進してゆきたいと思います。また、本学医学部の特徴である和漢医薬学(東洋医学)、認知情動脳科学さらに医薬理工連携による人材育成と研究を推進させてゆきたいと考えています。さらに、県唯一の医育機関として地域がん診療連携拠点病院、地域周産期母子医療センター等としての取組みを通じ、更なる地域医療の中核的役割を担ってゆく所存です。

富山大学同窓会は、1982年3月に発足されたと伺っており、私が医師としてスタートした年と一致します。私も2000年に同窓会に加えて頂きました。皆様が積み上げてこられた伝統と実績に敬意を表します。とくに平成25年より開始された「富山大学医療ルネッサンス事業」には多額の寄附金を頂きました。本医学部に多くのご支援を頂いておりますことを改めて感謝、御礼申し上げてご挨拶に代えさせて頂きました。今後ともご支援宜しく願います。



現代の人間社会が抱える 諸問題を考える

富山短期大学 専攻科長

会長 田 淵 英一 (医学科 昭和62年卒)

冒頭から申し訳ありません。ネガティブな話をします。昨今の日本の大学の現状は、惨憺たるもので、国立大学法人の各大学の予算は、毎年1億円ずつ補助費がカットされ、経費削減や教職員の人員削減が行われています。厳しい査定のある特別外部予算を多大な労力をかけて取得したとしても、毎年の評価を受けるため、その労務に追われ、昔のような自由な発想で自由に研究・教育するといった環境ではなくなりました。

ここ数年、日本人のノーベル賞受賞者が多く出てきて、世間では日本人研究者の優秀さが目立っていますが、彼らが研究してきた時代から比べると、時間的、経済的、精神的、物理的、すべての面において余裕がなくなっています。教職員の給与も、準国家公務員なので、最低賃金は保証されているものの、少なくともやる気の出るものではありません。

加えて、経済不況から、研究に携わる若者が急激に減っており、医学部においても例外ではなく、解剖学、生理学、生化学、病理学などの基礎研究を志す人材がほとんどいなくなりました。その結果、近い将来、基礎研究分野で教育する人材の確保すらも難しくなると言われています。若者の立場から言うと、親世代に金銭的余裕がなく支援体制が不十分であることや、不安定な時代に先の見えない世界にチャレンジすることは容易ではないようで、そう言われるともっともな気もして反論に窮します。

世界に目を向けると、テロ、景気変動、環境破壊(大地震、津波、CO₂問題など)など、これまでの人類の歴史にはない“人間が産んだ”地球規模の大きな変化が起こっています。テロは、現代の人間社会が生んだ負の遺産であり、景気変動も、資本主義の負の側面です。環境破壊すらも人間の関与が大きくあります。また、発展途上国での人口増加と先進国での高齢化による人口爆発も大きな問題で、地球上で人口がこのまま増加し続ければ、いずれ食料やエネルギーが枯渇し、争いが激化し、最終的には人口は減ることでしょう。確かに、人類の歴史を見れば、文明・文化の進歩と地球破壊は表裏一体(同時進行)の関係にあります。

ネガティブな要素ばかりが目立つ現代ですが、ここからはポジティブな話をします。人間は進化により高度な脳を持つことに成功しました。高度に進化した大脳皮質により、知性を持ち、文明・文化を発展してきたわけですから、やはり“COOL”に対応すべきではないでしょうか。最近、よくテレビ等で日本人のCOOLさが放送されていますが、我々日本人が日本人としての誇りをもっともっと持ってほしいと感じています。世界でトップレベルの勤勉さ、器用さ、これらに基づく最先端の技術もさることながら、世界の人々が崇拜する日本の伝統・文化を日本人がもっと知り、日本人が誇りを持って継承してってもらいたいと思っています。世界の人々が最も尊敬する日本の伝統・文化は、自然と共存する“和のこころ”だとよく言われます。私たち人間は、“動物”であり、自然から生まれた創造物です。自然と共存しなければ滅ぶだけです。私たち日本人が、日本古来から有する世界に誇れる日本の文明・文化をもっとよく知り、そして、世界に向けて発信していくことが肝要だと思っています。

現代は、人類にとって、過去を振り返り、反省する時期に来ているのかもしれない。